

オール電化・雨月物語

青柳碧人

アサチが宿

1.

八月十日未明より沖ノ鳥島おきとりを襲った台風十七号は、十二日の夜中には通過していた。勝城尚子かつしろなおこはその日の朝一番の便で羽田に飛ぶつもりだったが、台風は東京に上陸しており、入れ替わるように羽田発着の便がすべて欠航になっていた。

もともと便が少ないうえに、滑走路を作るほどの面積を確保できない沖ノ鳥島空港の発着便は、すべてオスプレイ機で席数も少ない。結局、席が取れたのは十三日の午後七時二十分発の「C R R 3 4 3 便」だった。

席と席の間はジャンボジェットのエコノミー席よりも狭く、隣の席の男性乗客とひじがぶつかってしまいそうである。話しかけられたら面倒なので、尚子は備え付けのムービーゴーグルを装着した。すぐに【安全のために】という救命胴衣講習の映像が始まった。

VRになっても、ほとんどの乗客がこの映像を真面目に観ないのは変わらない。すぐに、愁平への怒りがわきあがってくる。

百五十八センチという低身長。つぶれたような鼻。ハッキリ言っ
て見た目はマイナス評価だらけ。だが経産省勤務というスペックが
あった。向こうは向こうで尚子に一目ぼれをしていた。

条件はすべて合っていた。

合っていた、はずだった。

……あいつのことを考えるのはやめよう。東京に戻って問い質せ
ば済む話だ。必ず、元の仕事に戻す。

【安全のために】は終わり、映画選択画面になっていた。……つまら
ない男のことばかりを考えているのは癪だ。気晴らしに何か観るか
と視線を動かして物色するが面白そうなものはない。もともと映画
を観る習慣がないのだ。何か眠くなれるほど退屈なのがいい。

2.

国際海洋法ががらりと変わったのは、十年前のことだった。

領土から十二海里を領海とし、二百海里を排他的経済水域とする
——その、「領土」の定義が変わったのだった。周囲を海に囲まれた
島の場合、当該国籍を有する住民が百人以上、継続的に居住してい

ない島は領土と認めないというのである。

国際会議でこれを強固に主張したのは中国の代表だった。日本に得をさせまいという真の目的は、世界中の国が知るところだった。先立つこと二年、日本最南端の島とされる沖ノ鳥島周辺の海底に、想定をこえるレアアースが眠っている見込みが明らかになったからである。

沖ノ鳥島は岩礁がんしようの上にわずかに突き出た岩である。周囲をコンクリートで護岸ごがんし、新たに珊瑚さんごを植え付けて岩礁を育てる策をとってなんとか維持していた。中国の主張が通れば沖ノ鳥島は領土と認められず、日本は広大な領海と排他的経済水域を失う。日本はもちろんだん反対したが、中国は長年の設備投資の恩を着せてアフリカ、南米、東南アジアの諸国を味方につけていた。

ただ、日本もやられっぱなしではなかった。アメリカやオーストラリアに仲介の根回しをし、定義の改定を十年後に先延ばしにしたのである。辛くも得ることのできた猶予期間ゆうよに、政府は早急に手を打った。

沖ノ鳥島に国民を住まわせるプロジェクトである。

島の周辺は干潮時かんちゆうじに顔を出す珊瑚礁になっている。そこへコンクリートと建築材を運んで満潮時にも沈まない人工島を造り、住宅棟の他、発電、通信、上下水道、人工食肉工場、屋内農地など、生活に

必要な設備を急ピッチで建設した。並行して政府は東京都と話を
つけ、沖ノ鳥島を「沖ノ鳥島区」という二十四番目の特別区に指定し
た。さらに、沖ノ鳥島区に本社を置く企業と、その社員には十五年間
所得税を大幅に削減するという特別法を制定した。

公式に住民の移動が行われたのは、沖ノ鳥島区が設置されてから
一年後のことであった。その頃には住宅棟や企業用のテナントもか
なり整備され、ネット環境も本土と遜色そんしょくないほどに整備されていた。
映画館やプール、テニスコートなど、娯楽設備も整えられており、移
り住んだ人々は意外な快適さに驚いた。

免税措置の魅力もあり、沖ノ鳥島に会社を構えようと希望する企
業については、当初の予想をはるかに上回る応募があった。中には
沖ノ鳥島周辺の海底探査に積極的に名乗りを上げる企業もあり、中
国が次の策を打ち出す前に早急に海底資源開発に着手すべきである
と世論が盛り上がった。

ただ、問題が一つ浮上した。

急な人口増加に伴い、住居がまったく足りなくなったのである。
そもそも、埋め立てで面積を広げるには限度があった。沖ノ鳥島
は海嶺の上に奇跡的にできたような岩礁であり、コンクリート護岸
がなされている部分から外は水面下三千メートルの海底まで急斜面
を描いていく。仮にここに支柱を立てて屋根のように陸地を広げて

いくとなると、莫大な予算がかかることになる。

日本政府は各大学や企業にアイデアを求め、注目が集まったのが、《アサチホーム》の「海中集合住宅」であった。

尚子は、その技術の先駆者だった。

千葉県にある習志野工業大学の大学院時代から、彼女は国内外の水中建造物の研究をしており、「海中集合住宅」の構想をまとめた論文で賞を獲っていた。二十五歳で《アサチホーム》に入社すると、同社がすでに研究開発を進めていた3Dプリンターによる簡易住宅技術と自らの研究理念を合わせ、みなみぼうそう南房総に実験的海中集合住宅「シーグレイプ」を建造した。

海中の崖上の固い地盤に鉄骨を打ち込み、それを足掛かりにするように3Dプリンターで作った球状の住居を設置していく。まるで海の中に大きなブドウが生なったようなその集合住宅は建設業界で話題となっていたのである。

海中集合住宅の責任者として、会社はまず、尚子の技術をよく理解している松波まつなみという男を現場責任者として沖ノ鳥島に派遣した。だが三か月後、松波が辞職を申し出たのだった。頭はいいが体が弱い性質たちで、環境の変化に対応できず、そのうえ現場作業員との折衝せつしょうもうまくいかなかったらしい。

そして今年の三月、尚子は新興プロジェクト部の部長に呼び出さ

れ、松波の後任の現場責任者として赴任しないかと打診されたのだ
った。

尚子は驚いた。自分の研究が国家プロジェクトに組み込まれるの
ですら名誉なことである。その現場責任者を任されるなんて――。

だが、「行きます」と即答することをためらわせる理由が一つあっ
た。

婚約者の存在である。

宮城愁平。一年半前に『アサチホーム』が手がけた政府関係の建造
物の落成パーティーで出会った相手だった。

「やあ、今回はお世話になったね」

経済産業省の次官だという男性が、尚子の上司に話しかけてきた。
その次官にカクテルグラスを持ってついてきたのが、愁平だった。
次官と上司が親し気に話しながら離れていき、残された二人でなん
となく話すことになった。

「僕、ビールって苦手なんです。でも、カクテルみたいなのを飲んで
いると怒られるから」

頼りない男だ、というのが第一印象だった。やたら腰の低い丁寧
語も気になったし、中央に寄せるような短髪も、ストライプのスー
ツもあまり似合っていないような気がした。背は低いし、顔の作り
も平均以下だ。

「実は私、勝城さんの論文をいくつか拝読しています」

彼に対する評価が変わったのはこの一言がきっかけだった。

実際彼は尚子の論文の内容を《アサチホーム》のどの同僚や上司よりもよく理解していた。水中に建物を作ることがいかに省エネになり、またセキュリティ上の利点もあるか。尚子がその研究に込め続けている思いをすべてわかってくれている気がした。

「本当に素晴らしいお仕事です」

曇りのない笑顔に、尚子は心を開いた。

「宮城さんは、ふだんどういった内容のお仕事をされているんですか？」

「Qiyenっていう、新たな金融システムの導入の調整です」

日本の人口減少はすでに歯止めの利かない状態にある。アジア各国から働き手を獲得することでなんとか維持してきたがすでに経済力の低下は免れない状況にある。Qiyenはスイスやリヒテンシュタインで採用されているものをさらに発展させたシステムなんです——と、その仕組みについて宮城は説明してくれたが、門外漢の尚子にはよくわからなかった。だが、軌道に乗れば日本が再び世界の経済大国に返り咲くのも夢ではないのだと声に力を籠めるその姿に、将来性を感じた。経産省の官僚、夫としては申し分のないスペックだ。連絡先を交換し、すぐに交際が始まった。

交際を始めてから三か月目には、お互いに結婚を意識するようになっていた。

愁平は高校生のときに両親と死別しており、尚子は折り合いのつかない両親とは学生時代から没交渉である。家族に関する煩わしさはなかった。

住まいはどこがいいかという話も、二人の通勤に都合のいい目黒区内の土地ということで意見が一致した。尚子にとって水中建築はあくまで研究対象であり、自分が住もうとは思わない。

お互い仕事を続けること、結婚後もそれぞれの姓は変えないこと、家事・生活費の分担、それぞれのプライベートへの干渉などについてもストレスなく合意できたが、一つだけ、意見の合わないことがあった。

子どものことだった。

愁平が子どもが好きなことはわかっていた。二人で街を歩いているときに、すれ違う女が押しているベビーカーの中の赤ん坊に愛想を振りまいているのを見たことがあった。ショッピングモールで、泣きながら喧嘩している五歳ぐらいの男の子たちの仲裁をしたこともあった。そういう姿を見ると、尚子はうんざりするのだった。

「私は、子どもが嫌いなのだ」

付き合ってから半年がすぎてこの話になったとき、尚子は端的に言う

て切り上げるつもりだった。だが愁平は引かなかった。

「自分の子どもなら、きつと可愛く思えるよ」

「そうじゃなくって」

尚子は言いよどんだ。子どもは論理的ではないし、世話をしない
と何もできないくせにわがままで、すぐ泣く。そういうところもた
しかに嫌いだ。だが尚子が子どもを持ちたくない真の理由は、もっ
と根本的なところにあった。

性交渉のときに男性から出る、独特の体臭が苦手なのだ。

尚子が初めてそれに気づいたのは、大学生のときだった。学部
助教と恋仲になり、初めて部屋を訪れ、雰囲気は熟した。尚子も嫌
はなかったので助教に身をゆだねたが、いざことが始まるうとい
うときになって、痛烈な臭いに鼻がもげそうになった。

子どもの頃、近所に柿をくれるおばさんがいた。尚子は柿が嫌
いで、あるときもらった柿を自室の学習机にしまったまま忘れて腐ら
せたことがある。黴かびと糖分の入り混じったような絶望的なにおいが
部屋中に充満してしまった。

男の体臭はそれに似ていた。助教を押しつけ、トイレに駆け込ん
で胃の中の物をすべて吐いた。

それから何度か性交渉をする機に恵まれたが、決まって同じこと
が起きた。こっそり友人に相談したが、そんな臭いを嗅いだことは

ないという。精神的なものかと思つて医者に相談したが、原因は不明だった。

男は興奮したとき独特の臭気を発するのだ。誰が何と言おうと尚子の中では真実だった。

愁平にはそのことを告白していなかった。交際してから数カ月、性交渉は避けてきた。愁平は尚子の態度に何かを察してくれており、迫ってくることはなかった。そういう気遣いが好きだし、甘えてしまつてきたのだ。

試験管ベビーという手もちろんある。だが、子どもによつて時間が取られることを尚子は忌避きひした。費用をかけてまで手間のかかる子どもを得たいとは思わない。

やっぱり俺は子どもがほしい。それなら結婚はできないわ。

気まずい話し合いは一か月ばかりつづき、結局、愁平が折れた。

「子どもなんてなくても、君との生活は楽しいだろうから」

「ありがとう。愛しているわ」

愁平の作り笑顔の向こうのそこはかたない寂しさに、尚子は気づかないふりをした。

入籍は三月十三日。愁平の誕生日を選んだ。

上司に紹介された羊の美味なビストロでお祝いをし、その席で尚子は夫婦にとつて嬉しいことを告げた。

勤め先の《アサチホーム》の住宅部が、新居を割安で手がけてくれることになった——ということである。

「すごいじゃないか、尚子はやっぱり、仕事ができるなあ」

愁平は手放しで喜んだ。

「最新のオール電化設備も全部整えてくれるんですって」

「《アサチホーム》の技術は世界でも注目されてるもんなあ。こんなに嬉しいことはないよ」

尚子は誇らしく、満足感を覚えた。

次の日曜日、境さかいという住宅部の担当職員との打ち合わせが始まった。二十五歳でスポーツマンタイプの彼は、各設備についてしっかりと勉強しており、質問にも打てば響くように答えてくれて気に入った。決まった時間に沸く風呂や自動フォルダー機能つき洗濯機……夢のような新生活を想像し、尚子の胸は高鳴った。

「こちらのスペースは、将来お子さんができたときに子ども部屋として利用することができます」

境が言ったとき、愁平の顔に陰がさした。

「子どもは作りません」

尚子はきっぱり言った。境はきよとんとしたが、やがて「そうですか」とだけ言って次の説明に移った。愁平の表情にはやはり、気づかないふりをした。

新居の建築開始は四月七日。完成予定日は七月二十五日となった。それまではお互いの一人暮らしの部屋ですごそうという話をしていく矢先、尚子に沖ノ鳥島への赴任ふにんの打診があったのだった。

急な話で、赴任予定日は四月十日。一度行ったら二年は帰ってこられないという話であった。

「行きたいんだろ？」

愁平はいつもと変わらない顔で言った。

「わかるよ。行ってくればいい」

「いいの？」

「いいも何も。これは君にしかできない仕事じゃないか。日本のためにもなるし、君のキャリアにもハクがついて、もつと将来性のある仕事につながるかもしれない」

本当に話が早い人だ、とわが夫が愛おしくなる。尚子は自分の研宄してきた分野を生かし、今後も活躍の場を広げていきたいのだ。口に出していなくても、それを理解し、支えてくれようとしてくれる愁平は素晴らしい。そして誰より、こんな夫を見つけた自分を褒ほめたくなる。

「新居のことはすべて愁平に任せるわね」

「ああ。できてからしばらく一人暮らしになるのは寂しいけどね」

「たった二年よ。すぐに戻る」

かくして、四月九日の夜、尚子は沖ノ鳥島に旅立ったのだった。

3.

「あんたが勝城さんか？」

黄色い短髪。しわくちやの顔、鼻ピアス、開いた作業着の胸に光る金色のネックレス……こまむら狛村というその現場主任を一目見たときから、馬が合わない相手だと尚子は思った。

「はあー、若い若いと聞いていたけど、こんなに若いとはな。沖縄のリゾートと勘違いしてきたわけじゃねえよな」

尚子の体をいやらしい目つきで眺め回す。まだ五十にはなっていないだろうが、ずいぶんガラガラした声だった。沖ノ鳥島には、本土で仕事ができなくなった人間が集まっているから気をつけると上司に言われたことを思い出す。なめられてたまるか、と強気な性に火が付いた。

「まあ、俺たちは水着になってもらっても一向にかまわねえがな」

「現場を案内して」

冗談に応じなかった尚子が気に入らなかったのか、へっ、と唾つばを吐き、事務所棟を出ていく。

四月だというのに沖ノ鳥島の日差しは強く、尚子はUVカット仕

様のアオズキンなしでは歩けないが、狛村はずんずんと進んでいく。見渡す限りの白いコンクリートの向こうに、《アサチホーム》のロゴの入った建築用3Dプリンターが三台見えた。

近づいていくにつれ、尚子は違和感を覚える。形成されたWDFシリコンを吐き出す3Dプリンターから、のこん、のこん、のこん、と聞いたことのない音が聞こえているのだった。

「ねえあなた、この音は何？」

作業を見守っている赤いタオルを頭に巻いた男に尚子は訊ねた。

右の二の腕に、般若面はんぱにやめんの刺青がある。

「誰だあんた？」

「松波さんの後任だよ」

と、狛村が言う。

「お前みたいなお嬢に、主任が務まるのか？」

「この音は何、って聞いているの」

「知らねえ。半年くらい前からするんだよ」

「ちゃんとメンテナンスしてるの？」

「作業は問題なく進んでるよ」

「今すぐ止めなさい」

赤タオル男は渋ったが、尚子は無理やりスイッチを切り、メンテナンス用の扉を開こうとした。しかし、なかなか扉が開かない。砂と

錆び、それに飛び散ったWDFシリコンの塊がへばりついていて
だった。五分ばかり格闘したあとで、べりべりと音を立てて扉は開
いた。

ごとりと落ちてきた白い塊かたまりを見て、尚子は叫びそうになった。
シリコンの塊にまみれた、海鳥の死体だった。

「ああー、つははは」赤タオル男は笑う。「こんなのが詰まってるん
だあ。どうりで動きが鈍いわけだ」

「本当だな」

粕村もまた笑っている。

「ここんところ、この台からできたやつはちよつと欠けてるしな」

「欠けてる？」

尚子は粕村を睨みつけた。

「ああ、ほら」

粕村が指さした壁材の一部、たしかに五センチメートルくらいの
穴があいている。ラムネを落とした炭酸水の中の気泡のように、尚
子の中に一気に怒りが膨れ上がった。

「何考えてんの！ 水の中で使うのよ？ 欠けていたら使い物にな
らないじゃない」

「大丈夫だよ。貫通してるわけじゃないから水が漏れるもことはない」

「劣化速度が全然違うわ！ 安全意識はないの！」

「あつ？」狛村の目が鋭すまじくなった。「さっきからなんだよ、お前。現場を取り仕切ってるのはこの俺だぞ」

「あんた、水中建築の論文を何本書いたことがあるっていうの？」

思い切り高圧的に言ってる。

「何も知らないのはあんたのほうでしょ。私に従いなさい！」

「てめえ！」

アオズキンにつかみかかってくる狛村。尚子は一步もひるまず、

その鼻先に指を突きつけた。

「すべて稼働は中止！ 今すぐ東京の本社に連絡を入れてメンテナンスを呼ぶわ。いいわね」

そして、尚子はすぐに宿舎に戻り、本社の上司にビデオ通話をつないだ。

「松波さんが軟弱なんじやくだから、あんなふうにつけあがるんです。あれでは作業はいつになっても終わりませんよ！」

尚子の剣幕けんまくに「す、すぐに確認するよ」と上司はたじろぎ、通話を切る。その後もしばらく怒りは静まらなかったが、やがて落ち着いてくると、どっと疲れに見舞われた。

狛村——あの教育の程度の低そうな現場監督。赤タオル男を見る限り、他のスタッフもまた同じような人間だと予測できる。

領海と経済水域を守るための国家事業といえは聞こえがいい。だ

がその実は、太平洋の小島での建設作業。何かしらの事情で流れてきた作業員ばかりが集まっているのだろう。松波が音ねを上げたのもわかるというものだ。

頭が痛くなった。国家プロジェクトと勢い込んで来たけれど、決して華やかなものではない。

ただ、宿舎の設備は悪くはなかった。1LDKと一人暮らしにはじゅうぶんな広さで、《アサチホーム》の技術がいかなく発揮されていた。

リビングの隅には、最新のVRオンラインブースまで設置されていた。午後八時を待つて、尚子はKIKKAにアクセスし、あらかじめ作っておいたバンガロー型の対話ルームへ入った。

そこにはすでに、愁平のアバターがいた。

〈どうだい尚子。日本最南端の景色は？〉

すぐ目の前にいるかのように、愁平は訊ねてきた。

「最悪よ」

尚子は不満をぶちまける。

〈それは災難だったな〉

「本社に問い合わせたら復旧作業員が来るのに三日かかるって。普段からメンテナンスをしっかりとしなさいって説教しても、彼らは全然聞く気がないの」

へしようがないだろう。尚子のように恵まれて生活してきたような人たちじゃないんだよ、きつと。自分の常識だと思っていることを押し付けるんじゃないかと、相手の気持ちを聞いてやることも必要だよ」

思いがけず愁平は、冷静なことを言った。

「私にできるかしら」

「やるしかないよ。尚子にしかできない仕事なんだろう？」

ベストの答えだ、と尚子は思った。弱音を受け止めてなくさめてくれることを優しさと呼ぶ人間もいるが、それはただの軟弱だと尚子は思っている。私が唯一無二のエキスパートだと思いついてくれる。これこそ、私の夫に必要な条件だ。

「わかったわ。当り前よ」

尚子は微笑^{ほほえ}んでみせた。

翌日、3Dプリンターが動かないことを理由に欠勤しようとする作業員たちを支社の会議室に集め、尚子は研修を行った。

両腕全体にタトゥーが入っていたり、明らかに何かの中毒だった過去があるようにつねに体を震わせていたり、やはり一筋縄ではいかないような作業員が二十人ばかり。なぜお前の話なんか聞かなくていいんだと敵意丸出しの目つきを向けてくる彼らに向かい、尚子は自分たちが建設している水中住宅がどれほど重要なことなの

か、根本から丁寧に説明した。彼らのほとんどは「排他的経済水域」というのが何なのかすら知らなかったが、尚子の情熱のこもった講義に次第に前のめりになり、午前が終わるころにはすっかりやる気になっていた。

「勝城さん、あんたの話、なかなか面白いな」

昼休憩でスムージーを飲んでいると、粕村が話しかけてきた。

「しかし、俺たちが本当に国家プロジェクトなんて任されていいものかわかんねえ。俺なんて、群馬の建設会社の金をちよろまかしてよ。警察に突き出す代わりについて船に乗せられ、この変な島にきた主任なんて名ばかりだ。言われたことを、よくわかんねえままやってただけだよ」

「前任者の松波さんから説明は受けなかったの？」

「受けたけど聞く耳なんかもたねえ。俺の人生は終わったと思っていたんだ」

「終わりじゃないわ、始まりよ」尚子は確信をもって言った。「私たちがしているのは、日本の水産資源と鉱産資源を守る重大な仕事。未来の日本人が、必ずあなたを誇りに思うわ」

粕村は心底感動した様子で、うなずいた。

「しかし主任さんよ、午後はどうするつもりなんだ？」

すぐそばで弁当を食べながら、平瀬せが言った。昨日、3Dプリンタ

ーのそばにいた赤タオルの作業員である。

「プリンターが動かせないんじや、作業ができねえ。せつかくやる気になったのに、仕事がないんじやなあ」

「仕事はあるわよ。作業計画を一から立て直さなきゃ」

作業は、当初の予定よりだいぶ遅れている。プリンターのメンテナンスが甘かったことに加え、作業員がサボっていたのが大きな原因だった。

「そういうのは主任さんの仕事だろ。俺たちは学がねえ。上の命令に従うだけだ。たまにサボりながらな」

「自分たちで作るの。意見がある人は言っつてね。作業効率を上げて遅れを取り戻すにはどうしたらいいか。実際に現場に出ている人の意見を、大いに役立てたいの」

作業員たちはぼかんとしていた。だがやがてその眼には、大いなる希望が宿ることになる。

4.

粕村たちに連れられて《北回帰線ボーイ》を訪れたのは、六月十日のことだった。

「マスター。今日は俺たちのボスを連れてきたぜ」

狛村が声をかけると、カウンターの向こうで赤いエプロンを着た男が振り返った。まだらに染めた髪の毛を肩まで伸ばした五十がらみの彼は、尚子の顔を見て軽く会釈した後で、

「そこの、10番テーブル」

ぶつきらぼうに狛村に言った。カウンターのすぐ近くに、二十人掛けのテーブルが用意されていた。

「なかなかいい店だろ」

尚子を椅子に座らせると、狛村はニヤリと笑った。コンクリート打ちっぱなしの壁に、古びたサーフボードがかけられている。天井からはカモメの人形が三体、ぶら下がっている。お世辞にもおしゃれな内装とは言えないが、ここが太平洋のど真ん中の孤島だと考えたら、上々の居酒屋だろう。

全員が席に着くとほどなくして、人数分のビールの入ったピッチャーが運ばれてきた。各々のグラスにビールが満たされた。

「じゃあ勝城主任、乾杯の挨拶を」

狛村に促され、尚子は立ち上がる。こういうのはしたことがないが、最高責任者ならつきまとう仕事だとは承知していた。

「えー、今日、一通りの作業が終わりました。目標としていた日付より二日も早いわ」

3Dプリンターの復旧が済み、作業が再開してから三週間。計画

通り十二の海中住宅が設置され、上下水道の配管作業と電気設備の作業が終わったところだった。尚子はここまでの作業を、全行程終了までのおおよその見積もりを測る一ユニットと考えていた。

「この計画をもとに、新たに完成までの全工程を見直します。私の任期はとりあえず二年だけれど、一年半ほどで終わりそうね」

「だったら半年、遊ぼうぜ」

わはは、と笑う作業員たち。

「遊んでいる暇なんてないわ。この第一計画が終わったら、政府は追加で住民を送り込んでくる可能性がある。今や沖ノ鳥島住宅の倍率は七十倍を超えているそうよ。もっともつと精度を上げていかないと。技術向上はもちろんだけど……」

「主任」 狛村がたしなめた。「ビールの泡がいなくなっちゃいます」

わはは、と笑い声が上がった。

「……そうね。今日のところはお祝いしましょう。乾杯」

かんぱーい、と声が重なる。

久しぶりに飲む生ビールはこんなに美味おいしかっただろうかと思えた。

お祝いという言葉は間違いない。初めは絶対に仲良くなれないと思っていた彼らを、こうして手なずけることができた。やるべき仕事さえはつきりしていれば、みな、効率よく作業をしてくれる。それ

を引き出せた自分の能力に、尚子は満足している。

意外と言っては悪いが、料理は良かった。海ぶどうのカルパッチョ、タコの活き作り、アナゴの包み焼き……どれも独創的で、東京で食べても満足できただろうと思える。

「食材はすべて、沖ノ鳥島産なんだとよ」

すでに焼酎しやうちゆうに移行して顔を赤くしている狛村が自慢気に口角を上げる。水産物養殖の技術がここまで向上しているとは知らなかった。

「この焼酎も」

尚子の前に置かれたボトルには、『沖ノ鳥麦焼酎 絶海天国』とある。

「すつきりしてて美味しいよ。本土の居酒屋からも注文が入ってるっていうけど、三倍以上の値段だつてよ」

「輸送費がかかるもんなあ。」

平瀬が言いながら、『絶海天国』を自分のグラスに注ぐ。尚子は一つ考えることがあった。

「この島はそのうち、観光地としての機能も持つようになるかもしれないわね」

「まさか」狛村は笑った。「何にもない島ですよ」

「でも、この島でしか体験できないことがあるとしたら？ 飲食物

だってそう。海だってあるんだし、アクティビティはいくらだって作れるでしょう？ もし観光地として注目されるようになれば当然、ホテルを建設しなきゃいけないよ」

「俺たちの出番だ！」

話を聞いていた、若手の作業員が叫ぶ。

「そうよ。この島は生まれたばかり。この地を魅力的にするための仕事はまだまだあるわ」

「一緒にやろうぜ、主任」

狛村もまた、高揚こうようしていた。ええ、と返事するのを尚子はごまかした。新しい観光地を作る仕事が魅力的でないわけではない。会社にだって企画は通るだろう。だが、東京に家を買ってしまったばかりなのだ。もともと二年で戻るつもりなのだから。

ガラガラと引き戸が開いた。

「マスター、遅くなってすまなかった」

ストライプのタオルを首からかけた、ポロシャツ姿の男だった。年齢は三十代の前半だろうか。日焼けした顔と無精ぶしやうひげは狛村と同じだが、狛村よりもずっと清潔感がある。

両手に抱えた段ボール箱を、カウンターの上に置く。マスターが厨房から出てきた。

「福崎ふくまきさん、何を持ってきてくれたんだ？」

「これは米ナス、これはオクラ」

「ずいぶんとでかいな」

たしかにオクラだが、ニンジンぐらいの太さがあった。

「遺伝子工学っていうのは、こういうものを作る仕事だから」

「どうやって食うんだい？」

「輪切りにしてソテーとか、フリットなんかも美味しいと思うけど」

「へえー、やってみるか。ちようどお客もいっぱいいるしな。福崎さんも飲んでいきな」

段ボール箱を抱えて厨房ちゆうぼうへ戻るマスター。尚子はそれとなく、汗を拭く男の姿を見ていたら、男が不意に振り返り、目が合った。

尚子は、目をそらした。

その夜、仮住まいの部屋に戻ったのは二十三時すぎだった。足取りはしつかりしていたけれど、酔っていた。

粕村は酔えば酔うほど面倒見がよくなる性質で、嫌な雰囲気はなかった。男ばかりの飲み会など下品な話題に終始するだけかと思っていたが、みな尚子の話を聞いてくれたし、沖ノ鳥島に来るまでのことを話してくれた。大なり小なり後ろ暗い過去をもつ人たちだったが、ここで人生を立て直すきっかけをつかめた気がする、そろって希望を口にした。

そんなに甘いものではないだろうけれど、と尚子は思う。いい人生を送れるかどうかは努力次第。誰かの努力のきっかけを作れたと思ったら、悪い気分はしない。

目を閉じる。ふと、福崎の顔が浮かんできた。野菜を持ってきたあと、粕村の誘いで尚子たちの飲み会に交ざったのだった。

彼は農学博士で、沖ノ鳥島住民が自給自足できる作物の研究のため、農林水産省からの要請を受けてやってきたということだった。口数は少ないが基本的に笑顔だった。農学……今まで関心を持ったことのない分野だ。

チコリン、チコリンと音が鳴る。K I K K Aの着信音である。

VRゴーグルを装着し、バンガロー仕様の通話ルームに入ると、Tシャツ姿の愁平がいた。

〈やあ〉

やけに機嫌がいい。

「ええ、まあ。今日はちよつと疲れているわ」

〈あれ、酔ってる？〉

平静を保って答えたつもりが、わかってしまったようだった。

「大きな仕事の一つ終わったの。愁平も酔っているようね？」

〈今日はほら、竹下部長の家に行く日だったろ〉

「ああ」

生返事をした。忙しさの中で、ここのところ、通話をして愁平の話など耳を通り抜けていつている。

〈可愛かったよ、竹下部長の娘さんたち。上が小学校二年生で、下が年長さんだって。二人で俺の歓迎ダンスなんて踊ってくれちゃってさ〉

画面の向こうでスマートフォンの画面を見てニヤニヤしている。

「他人の子どものダンスなんて録画してどうするの？ それより、家の建築のほうはどうなの？」

〈ああ、順調に進んでるよ。梅雨つゆに入っちゃうと天候が心配だけだね。それより、小学校二年生ってもう、お手伝いできるんだね。ニンジンの皮むきを手伝ったんだってさあ、ミコトちゃん〉

どうしても上司の娘の話をしたいらしい。酔って、子ども好きの本性が現れてきている。胸の中に虫が這はっているような感覚に襲われた。

「もう切るわ」

〈待ってよ、一つ話したいことがあるんだ〉

「何よ」

愁平のAvatarは話しくそうに、だが真剣に、尚子の顔を見つめていた。とてつもなく嫌な気持ちがあった。

〈沖ノ鳥島から帰ったら、やっぱり、子ども作らないか？〉

……やっぱり。

〈面倒は俺が全部見るよ。尚子はすぐに仕事に復帰していい〉

嫌悪感で背筋が寒くなる。妊娠期間、そして産後の体の回復。どれくらい時間を無駄に思うっているのだ。それについては何度も話し、結論に合意したはずなのに！

〈やっぱり、子育てって人生の大きなイベントってどうか。俺、やってみたいなあって……〉

「子どもは作らない！」

尚子は声を荒らげた。

「くだらない話を蒸し返さないで」

怒られた犬のように、夫はしよげ返っていた。怒りは収まらず「おやすみ」と、一方的に告げて通話ルームを出た。

5.

朝の散歩を始めるようになったきっかけは、粕村の勧めだった。

最近はK I K K Aで愁平と話していても、いらいらすることしかない。愁平の子どもを作らないかという言葉が原因だった。あれ以来愁平はその話をすることはない。だが、心変わりをしていないのは目に見えていた。

亀裂。きれつ

そんな言葉が頭に浮かぶ。

愁平のことは愛している。だが、どうも合意できない一点がある——苛立ちが仕事にも顔に出ていたようだった。大丈夫ですか主任、と狛村が声をかけてきた。

「どうしてもむしゃくしゃするとき、どうする？」

適当にやり過ぎしてもよかったのに、そんなことを訊ねた。

「スポーツすかね。俺らと一緒にやりますか、フットサル？」

「やらないわよ」

「それじゃあジムに通うとか。まあでも沖ノ鳥島のジムはどこも狭くて、マシンが空くの待つのに時間がかかるしな。まあ、朝散歩するだけでも気が晴れますよ」

試しに翌日から始めたら、言うとおりであった。潮の臭いも太陽の光も、昼間と違って柔らかい。狭い島なので、どんなに複雑なコースを通っても、疲れすぎる前に帰ってくることができる。それに、知らなかつた島の施設を知ることができた。

ただその日は少し、様子が違った。空が今にも落ちてきそうな黒い雲に覆われていたのである。雨が降るなら降ったで、帰ってシャワーを浴びればいい。そんな軽い気持ちで散歩を始めたことを、五分後に後悔することになった。

ぽつぽつと降りはじめた雨はあつという間に土砂降りになった。全身ずぶ濡れになりながら、手近な建物のエントランス前のひさしに入る。すると、自動ドアが開いた。

雷が鳴っていた。ためらわず、尚子は中に飛び込んだ。

白いリノリウムのタイルが敷かれた、円形の部屋。黒いガラスの扉が四つある。導かれるように尚子は、一番右の扉へ近づいていく。音もなく、扉が開く。

数歩入ると、すぐに背後で扉は閉まった。そこに広がっている光景に、尚子は息をのんだ。ピンク色の光の下に、広大な畑が広がっているのだった。ある種の野菜の光合成には、ピンク色の光が有効なのだとかの記事で読んだことがある。

生い茂る葉の中に、巨大な丸い実がいくつも生っている。スイカだろうかと思ったが、すぐに違うと思った。スイカは地べたに転がるように生るはずだ。目の前の実は太い枝にぶらさがるようについている。

より近づき、その実を手にとってみる。

「……トマト？」

間違いない。ヘタの形、全体的なフォルム、手触り……トマトに間違いない。スイカほどもあるトマトだ。不思議な感覚だった。まるで自分が小人になったような感じさえある。

「爆弾小町ばくだんこまちっていうんだよ」

はっとして振り返ると、すぐそばにストライプのタオルを首からかけた福崎が立っていた。

「ごめんなさい、私、勝手に」

口をついて出た言葉に尚子は自分で驚いた。自分が謝罪の言葉を口にするなんて。学生時代以来、自分が間違うことなどないと思っていた。咎とがめられたときにも、意見を強く主張すればいいは、相手が謝るか折れるかして結論が導かれた。勝手に研究施設に侵入したことだって、雨宿りのために仕方なかったと言えばすむ話のはずだった。それなのに、彼の顔を見て開口一番「ごめんなさい」と……。

「従来のトマトの四倍の直径だ。大味と思うかもしれないが、むしろリコピン濃度は従来の1・2倍なんだよ」

福崎は気にせず、その爆弾小町というトマトの解説をしている。

「食べさせてあげたいところだが、今はまだ青い」

「いいえ。そんなつもりで入ってきたんじゃないの」

すると福崎は、ふっ、と噴き出した。

「わかってるさ。急に雨が降ってきたんだろ？」

「……ええ」鼻がむずむずしてきた。

「沖ノ鳥島に来てから一年半が経つけど、ここの天気は本当に読め

ない。それに台風は本当にやっかいなんだ。去年は露地栽培でこいつらを育てていたんだが、全滅してしまった」

くしゅん、と尚子は我慢できずくしゃみをした。

「ああ、ごめん。そのままじゃ風邪を引いちゃうな。奥へどうぞ」

「でも」

「タオルを貸してあげるから。それに、面白いものを見せてあげるよ」

少年のように無邪気な笑みを見せ、福崎は尚子を畑の奥へと誘っていく。爆弾小町のエリアが尽きると、そこはやたら長いきゆうりの林だった。ぐんぐん進む福崎の後を追いかける尚子の鼻を、葉の青臭さが撫でる。人工的なピンクの光の下、野菜の成長の営みいとなは自然そのものだった。

しばらく行くと、白いテーブルセットと棚のある空間に出た。さらに向こうにはトウモロコシが植わっている。

「ほら、これ」

福崎は棚から取り出したタオルを尚子に差し出した。受け取り、髪などを拭く。福崎は同じ棚からスープ皿とバーナーを取り出し、そばにあったテーブルに置く。尚子を椅子に座らせると、トウモロコシのほうへ歩み、一本もぎとってきた。器用に皮を剥き、左手でスープ皿の上にかざすようにする。

「見ててごらん」

バーナーに火をつけ、トウモロコシの表面を炙る。ぷち、ぷちと音がして皮が破れ、中からとろりと雫が流れだす。あれよあれよという間に、そのとろりとしたものは皿の中に溜まっていく。一分ほどで、あたたかなスープが出来上がった。

「じゅっぞ」

スプーンを取って一口、とろけるような甘みが舌の上に広がっていく。

「すごい。おいしい」

「スープ専用トウモロコシ。まだ名前はないし、俺以外に食べたのは君がはじめてだよ」

ほのかな嬉しさが胸の中に灯る。尚子は夢中で、スープを飲み続けた。

6.

福崎と恋仲になるのに時間はかからなかった。

研究室は福崎の他には、農林水産省の役人が一人勤めているだけで、栽培室にはほとんど入ってこない。福崎はいつのまにか手製のベッドを、爆弾小町の苗に隠れるような位置に設置していた。

性交渉についてはやはりためらいがあったが、福崎は「これを試してみよう」と小さなナッツをテーブルの上に置いた。一粒を自分で噛んでみせ、もう一粒を尚子に渡す。干からびたピスタチオのような味がした。

それから、ことが始まった。

どういうからくりなのかわからないが、本当に体臭が気にならなかつた。尚子は初めて、女性としての喜びを知ることができた。

もとより、仕事が終われば職場の作業員とは顔を合わせることもない生活をしている。福崎とのことが漏れている様子はなかつた。

唯一、アリバイを作らなければならない相手は愁平だった。

〈やあ、今日はどうだった？〉

「どうって、別に。計画通りよ」

子どもの一件で気まづくなってから、K I K K Aでの通話は二、三日に一度のペースに減っていた。

〈そうか。こっちは大丈夫。もう一階部分はほぼ完成したよ〉

家の建築は順調に進んでいるようなので、事務的な話題には事欠かなかつた。義務で通話しているのだということ悟られるほど、尚子は馬鹿ではなかつた。十分ばかりの通話をして、「おやすみ」と言って通話を切るだけだった。

「主任、最近いいことあったのか？」

福崎との関係が始まってから三週間ほどが経ったとき、狛村が訊ねてきたことがあった。

「どうして？」

「最近、よく笑うから。それに、肌つやも良くなったような」

「まさか」

「いや、これはマジ。この島に来た人間はもろに日差しを受けてほしいはシミやシワができて日焼けしていくもんだが、あんたはむしろ、初めて会ったときよりむしろ若返っているような気がするよ」
恋でもしてるんじゃないか、とニヤける狛村を、尚子は軽くないす。

「馬鹿言ってるんじゃないわよ」

「俺は別にいいと思うがな」

狛村は引かなかった。

「太平洋のど真ん中の小さな島。本土からは遠く離れてこらく娯楽は少ない。そりゃ、浮気ぐらいするよ」

「あなたもしてるの？」

「俺は女房子どもに逃げられたって言っただろ？ 女を作ったとしても浮気じゃない。……ま、俺のことを相手してくれる女なんて、この島にいないだろうしな」

「ええそうね」

「ひどいな、あんたは」

「さあ、仕事に戻りなさい」

肩をすくめながら作業場に戻る粕村。その背中を眺めつつ、バレてもいいか、という気持ちが芽生えていた。もともとは広大な海洋のど真ん中にポツと突き出たような岩礁だった島。世界のどこからもこれ以上ないほどに隔絶かくせつされている。

福崎はまるで少年のように無邪気だが知的で、尚子の気持ちを逆なですることはない。恋人として十分すぎる相手だ。だが、愁平との結婚生活をなげうってまで一緒になろうという相手ではなかった。

福崎は大学教授の助手であり、恩師の教授の手伝いをしているうちに自然と野菜のしくみを理解していったという。世界中の論文を読み漁ってはいるが書くのは苦手で、自分の論文を一度も提出したことがない。つまり学会ではまるで知られていない、社会的立場など皆無の人間なのだった。経済産業省の官僚である愁平と福崎と、どちらが自分のパートナーにふさわしいか。天秤にかけるほどでもない問題だ。

だから福崎との関係は、沖ノ鳥島を去るときにきっぱりと断ち切るつもりだった。福崎にもそれは会うたびに伝えているし、向こうももちろん納得していた。期限付きの恋……それは悲しいものではなく、むしろ二人をより燃え上がらせた。抱きあう二人の横で、爆弾

小町は確実に色づいていくのだった。

八月十日。沖ノ鳥島を、台風が襲った。

これまでも風の強い日は高潮が作業現場を襲うことがあったが、外に出るのも危ぶまれるほどの荒天は初めてだった。沖ノ鳥島区役所から外出禁止命令が発動され、当然だが建設も中止となった。

尚子は朝から部屋の中にいて、窓に叩きつける雨の音を聞いていた。建設中の海中住宅が破壊されるのではという心配は全くない。計画はむしろ順調すぎるほど順調で、ここらで数日、休みを取ってもいいと思っていたところだった。

コーヒートを淹れ、クラシック音楽をかけ、こちらへ来た初日に本棚に並べて以来そのままの文庫本を取り出して読み始めた。食事も緩やかに取り、久しぶりの休日を満喫した。まんきつ

インターホンが鳴ったのは、午後三時二十分のことだった。風雨は朝より酷い。夕方から晩にかけて一番のピークが訪れるだろうという予報だった。こんな時間に誰が、とモニターを起動して驚いた。

「福崎さん？」

〈尚子、開けてくれ〉

部屋に招き入れた福崎は赤い宇宙服のようなレインコートを身にまとっていたが、びしょ濡れだった。銀色の袋を、玄関のタイルの上

に置く。

「どうしたの？」

「この島に来て初めての台風だろ？ その……尚子が、寂しがっているかと思ってる」

あまりにまっすぐな目に、思わず笑ってしまった。だが福崎のほうはそうはいかなかった。コートをその場に脱ぎ捨てるなり、尚子に抱きついてきた。

「寂しかったのは、あなたのほうじゃないの？」

冗談めかす尚子の唇に、福崎の唇が重なった。尚子は応じた。突然の来訪は驚いたが、嫌ではなかった。服を脱がせあいながら、ベッドへともつれた。思いがけず肌寒くて、くしゃみが出た。その肌もすぐに、福崎の情熱と優しさに温められた。

——甘美な時間が、どれくらい流れたのか。

気づけば外は暗く、窓を叩く雨音はほぼ暴力的と言っていいほどになっていた。

「もう七時半じゃないか。お腹すいたろ」

福崎はベッドから起き上がり、下着を穿いた。そして玄関へ行き、ほったらかしにしてあった銀の袋を持ってくる。

「今朝、採れたんだよ」

取り出されたそれは、真っ赤に色づいた爆弾小町だった。

「できたのね」

「ああ。室内栽培の第一号だ。ステーキにしよう」

「トマトのステーキだなんて」

「美味いと思うぜ」

キッチンへと消えていく福崎。手早く衣服を身に着け、尚子も追った。スイカほどもあるその巨大なトマトを、彼は包丁で赤道方向に輪切りにしていた。中はぎゅっと詰まっているらしく、思ったほど汁は出ない。

「フライパン、あるか？」

「ええ」

シンクの下からフライパンを取り出す。調理台の上に置かれた袋の中には他にも野菜が入っていた。サラダかスープでも作るつもりなのだろう。

「パンを出すわね。ちようど昨日焼いたばかりだから」

「尚子が焼いたのか？」

「それくらいできるわよ。一人暮らしが長いもの」

会社が用意したこの部屋は、最新の電化製品が備え付けられていた。万能クッカーもずいぶん使い勝手がいい。

福崎の笑顔を見て、楽しいな、と思う。国家事業に携わりながら恋愛まで楽しんでしまうなんて、なんて器用な人生だろう。

チコリン、チコリンと、気分を壊す電子音が響いたのはそのときだった。

「何だこの音？」

「K I K K Aよ。きっと夫だわ」

八時前にかけてくることは珍しいが、他にかけてくる相手も思い浮かばない。料理を続けて、と言い残し、隣の部屋へ足を運ぶ。

〈やあ、尚子〉

ダークブラウンの壁の前で、部屋着姿の愁平が笑顔を浮かべていた。

〈そつちは台風まっただ中だろ？ 大変だな〉

「わざわざかけてくれたの、ありがとう。でもちよつと今夜はやらなきゃいけない仕事があるの」

通話を切ろうとしたら、

〈待って〉

いつになく真剣な様子で彼は止めた。

〈尚子に報告があるんだ。家、できあがったよ〉

「はい？ 完成予定は再来週でしょう？」

〈それが、ちよつと家の規模を小さくしたんだ。前の図面どおりだと広すぎるかなと思って。家族はもつとぎゅつとしないと〉

急激に怒りの感情がわいてくる。

「勝手なことをしないで！ 相談もせずに！」

〈相談したら反対したろ？〉

当たり前だ。家の広さは能力に比例すべきだ。国家事業を任せられ、官僚を夫とする自分は、二十三区内にあれくらいの広さの家を建てて当然なのだ。

「境君にはあとで私のほうから連絡するわ。もともとの図面に戻すのよ」

〈まあまあ。尚子、それよりもっと大きな報告があるんだよ〉

これ以上大きな？ 想像がつかない。そして、悪い予感しかしない。

〈俺、経産省やめたんだ〉

「……え？」

〈いろいろな人生を見つめなおしたんだ。俺が本当に好きなことは何なのかって〉

「今さら、そんな学生みたいなこと……」

〈俺、やっぱり子どもが好きなんだよ。だから、保育園に就職した〉
なぜか喉が痛くなった。何の言葉も出てこなかった。

〈資格がないから事務しかやらせてもらえないんだけど、ゆくゆくは勉強して資格を取って、保育士になろうかと思うんだ。ねえ、尚子も応援してくれるでしょ？ 俺は尚子を、沖ノ鳥島に行かせてあげ

たんだから……」

目の前の画面が暗くなった。尚子が通信を切ったのだ。愁平とこれ以上繋がっていたくなく、VRゴーグルを脱ぎ捨て、ブースから飛び出して、コードを引っこ抜いた。どんな男の体臭を嗅いだときにも経験したことのない吐き気が全身を駆け巡った。トイレに駆け込み、黄色い胃液をぶちまけた。

「どうしたんだ、大丈夫か？」

口元を拭きながら振り返る。福崎が心配そうに尚子の顔を見ている。尚子は床に手をつき、ゆっくりと立ち上がる。心配そうに伸ばされた浮気相手の手を、振り払った。

「帰って」

「なんだよ？ どうしたんだよ？」

「帰ってよ！」

さつきまで愛おしいと思っていた福崎のことが、今や煩わしくなっていた。

どうして？ どうして邪魔をするの？

私はこの世で私にしか考えつかない素晴らしい建築モデルとその活用法を編み出した。それを国家事業にも採用され、成功したあかつき暁には無限の可能性が待っている。後世の人類がナオコ・カツシロの名を語り継ぐ……そのためには、尊敬されてしかるべき人生ステータ

スが必要なのだ。夫の社会的地位は絶対条件だ。その夫が、官僚という立場を捨てて……保育士？ ありえない。ありえない。私の夫が保育士だなんて！

「なあ、本当にどうしたんだ、おかしいぞ」

福崎は困惑している。この緊急事態がわからないのか。もう遊びなんて終わりだというのに。

「帰ってってば！」

「帰って言ったって、この天気だぞ？」

家全体が揺れるくらいの暴風雨。たしかにこの男を追い出して死なれでもしたら、そこで尚子の人生は終了だ。

「台所で寝てもいいわよ。雨風が落ち着いたら、帰って」

それだけ言って、寝室に飛び込んで鍵をかけた。

布団をかぶり、夫の顔を思い浮かべる。あの低能男は血迷ったのだ。もともと精神の不安定なところのある人間だと思っていたのだ。近くにいて手綱たづなを握っていなければならなかった。まだ間に合う。東京に戻らなければ。愁平の首根おもむっこを掴んで経産省に赴き、官僚に戻してくださいと頼まなければ。

「尚子、尚子！」

福崎はドアをたたき続けている。どうしてみんな邪魔をするのか。どうして——。

羽田空港についたのは、午後十時三十分のことだった。

半年ぶりの本土は台風一過の澄んだ空気だったが、もちろん尚子が爽やかさを感じることはない。オスプレイ機の中で見た映画はわけがわからなかった。魚の絵を得意とするイラストレーターが夢の中で魚の視点になり、殺人を目撃する。目が覚めると病院にいて、自分を手術したという医者がその殺人犯とまったく同じ顔だった。夢と現実のはざまが曖昧になっていき……後の話は覚えていない。それでも途中で眠れたらよかったのに、頭は冴えていた。

実際、愁平から保育士になると告げられたあの日から、怒りではとんど眠れていない。無視し続けた福崎が帰ったのは、きっとあれから十時間後ぐらいだったろう。静まり返った廊下を歩いてダイニングへ行くと、テーブルの上には冷え切った爆弾小町のステーキとサラダ、スープ、それにパンが並んでいた。それらをすべてゴミ箱の中に叩き込み、カップ麺を食べたのが二日前だ。

本当ならその日のうちに本土に戻って愁平を問い詰めたい気持ちでいっぱいだった。だが台風は関東地方を直撃しており、空港がすべて封鎖されていた。その日のうちに三日の休みを取る手続きを終

え、今日、ついに羽田へ戻ってきた。

無人タクシーにはすぐに乗れた。ナビゲーションシステムに、マイホームが建っているはずの住所を打ち込む。ドアは閉まり、すべるようにタクシーは発車した。

人間の運転手ではなくって本当に楽だった。のべつ幕無しに話しかけられていたら、腹が立って仕方ないところだった。

山手トンネルのオレンジ色の明かりを見ながら、今向かっている地に愁平と下見に行った日のことを思い出す。

——ここに俺たちの家が建つんだね

愁平は感慨深げだった。

——何年も何年もかけて、家族の時間を刻んでいくんだ。

考えてみればあの日から、おかしなことを言っていた。子どもを作らないことでは同意していたので、いつまで経っても尚子と愁平の二人だけ。「夫婦」と表現すべきなのだ。

彼はあきらめていなかった。このままでは里子をもらおうなどと言い出しかねない。

平穏を取り戻さなければ。彼を、経産省勤めに戻すのだ。

目的地についたのは、午後七時十分だった。

規模を縮小したと聞いたので不安だったが、きちんとしたたたず

まいの家だった。設計図通りなのでは、とすら思えた。

愁平とはあれ以来K I K K Aでの通話はしていない。呼び出しても反応がない。今日の羽田到着の時刻を一方的に告げてあるだけだ。ダークグレーの扉のすりガラスの向こう、ライトは点灯しているのですでに帰っているものと見える。

一応、インターホンを押した。ややあって、「はい」とスピーカーから愁平の返事がある。

「私よ」

〈おかえり〉

いつもと同じ声。間拔けな笑顔がすぐそこにあるようだった。冗談じゃない、と思っていると、玄関扉がこちらに向けて開いた。《アサチホーム》が誇る、家庭用自動ドアである。

シーリングライトの明るい玄関に入る。愁平の姿はそこになかった。背後でドアが勝手に閉まり、サムターンがひとりでに回って施錠じようされた。

目の前、三メートルほど廊下がつづき、突き当りは上り階段になっている。両脇に扉があつて、片方はバスルーム、もう片方はリビングダイニングのはずだった。

「ごめん、尚子」

リビングダイニングのほうから声が聞こえた。

「今、ちよっと手が離せないんだ」

何をのんきに。こちらは腹の中が煮えくり返っているというのに。尚子はパンプスを脱ぎ捨て、リビングダイニングに飛び込んだ。

誰もいなかった。白いテーブルに、椅子が四つ。

「こつちだよ」

キッチンの中から声がした。尚子の位置からはシンクが見える。

しかし、誰も中にいる様子はない。しゃがんでいるのだろうかとかと、キッチンへ入る。

誰の姿もない。

「どこにいるのよ？」

「こつちだよ」

三ツ口のコンロ付近から声が聞こえた。まさか、体が小さくなってしまったわけでもないだろうに。近づいていくと、深鍋の陰に緑色の丸いスピーカーが置いてあった。

「引っ掛かったね」

手にしたスピーカーがしゃべったその瞬間、にゅっと背後で何かが動いた。床から壁がせりあがってきたのだ。だがそれは太ももぐらいの高さで止まった。

「何よ、これ」

「台所では火も使うし、包丁なのなんなの、危ないものもあるだろ。入ってこられないようにさ」

意味が分からない。ただただ、夫への怒りが増長されるだけだった。

「どこにいるのよ？」

「探してごらん」

尚子は床から上がってきたその低い壁を乗り越え、リビングダイニングに戻る。ソファアの陰を覗くが誰もいない。庭か、とカーテンを開けるが、暗い空間が広がっているだけ。ただ、一台の真新しい三輪車があった。

「なんで、三輪車なんか」

上司の子どもへのプレゼントだ、とでもいうのだろうか。

背後で何か音がした。

廊下へ通じるドアから、小さな何かがすーっと床を滑^{すべ}ってくる。

ミニカーだった。

「愁平、そこにいるの？」

廊下からも、手元のスピーカーからも返事がない。

廊下に出る。バスルームを覗くが暗くて人の気配はない。トイレのドアを開けるがここも誰もいない。ということは、と階段を見上げる。

まるで今磨いたかのような階段だった。一步上ると、シーリングライトが点灯した。

「待つてなさい」

一気に二階へと上る。ドアは、二つしかなかった。寝室とそれぞれの部屋、それにトイレ。当初の設計図ではそういう間取りになっていたはずだ。愁平は勝手に部屋を二つ、減らしたことになる。

「愁平！」

手近の扉を開く。ダブルベッドが一つあるきりの殺風景な部屋だった。寝室としての広さは申し分ない。

愁平はいない。もう一つの部屋か、と戻ろうとしたとき、小さな電子音が聞こえた。やがて、脳が聞いたことのある旋律を捕らえる。

「ハッピーバースデー・トゥー・ユー」だった。子ども用の音の出る玩具から出ている音楽のようだ。

そのとき、尚子は気づいた。

ベッドの足もとの壁に、緑色のカーテンがかけられている。窓もないのにどうしてカーテンがあるのか。

「愁平、そこね？」

飛びついて、一気に引いた。

カーテンに隠れるようにして、オレンジ色のドアがあった。高さは百二十センチほどしかない。物置だろうか。

音楽は中から聞こえている。尚子はノブを握り、ドアを引いた。

「えっ——？」

中は、広がった。乳白色の壁紙に、動物やお花畑の絵が描いてある。羊の姿を模した二人掛けソファ。ハート形の可愛らしいクッションは、まるで尚子の趣味とは違う。歩行器にベビーベッド、哺乳瓶を煮沸する専用機まである。天井からは人形のぶら下げられた、赤ん坊を寝かしつける傘のような玩具が三つもぶら下がってぐるぐると回転している。「ハッピーバースデー・トゥー・ユー」はそのうちの一つから流れているのだった。

「なんなのよ、これは……」

怒りというより戦慄せんりつに近い感情で、膝が震えてきた。

ベビーベッドの頭方向の床に、犬やウサギ、ゴリラにイルカ……様々なぬいぐるみが山と積まれている。そのゴリラが、ふるふると動いた気がした。

「そこにいるのね！」

尚子は戸をくぐりぬけ、ぬいぐるみの山に直行する。ゴリラの腕をつかみ、持ち上げた。

ぬいぐるみの山に埋もれていたのは、奇妙な顔のロボットだった。プラスチック製のボール状の顔に、黄色い目が二つ。横に広い口の中には、虹色に光る歯が並んでいる。

なんなの、いったい。混乱していると、ぬいぐるみの中から、ロボットの細い腕がしゅっと伸びてきて、尚子の右手首をつかんだ。

「痛い！」

すかさずもう一本の腕が伸びてきて、左手首もつかまれる。

「何なのよ、離して、離して！」

もがいていると、ばたんと音がした。オレンジ色の扉が閉じられていた。

「黙ってて悪かったよ、尚子」

愁平は、ドアのすぐ向こうにいるようだった。

「でも俺、尚子とつきあうずーっと前から考えていたんだ。結婚したら子どもを作ろう、子どもにはたくさん時間を使って、たっぷり愛情を注いでやろう……って」

「愁平、その話は……」

ロボットを引きずりながら、ドアのところまで戻った。ノブを握るが、回らない。

「境さんにそのことを相談したら、『それなら子ども部屋を作りましょう』って、快く乗ってくれた」

何のことはない。境が騙されたのだ。この、独りよがりで無能な男に！ 尚子は憤りいらだちまかせにドアを叩こうとしたが、ロボットの腕が邪魔だ。ドアに、頭突きをした。

「許さないわ！ 私に内緒で、こんな、何の役にも立たない部屋を！」
何度も何度も、額を打ち付ける。血が流れて目がかすんだ。

「尚子も考え直そうよ。沖ノ鳥島のプロジェクトなんて他の人に任せてき。きつと俺たちの子どもは可愛いと思うよ」

「うるさい！」

「保育士資格の勉強をしながら、家事は俺が全部するよ。もちろん、育児も。仕事でも家庭でも子どもと触れ合っていられるなんて、こんな幸せはないんだ」

「黙れ、黙れ黙れ、だまれっ！」

「男の子でも女の子でもどっちでもいいんだ。実はもう、名前も考えてある」

「死ねっ、死ねっ！」

くらくらしてきたが、やめるわけにはいかない。この男の性根を叩きなおしてやるまでは！ 私の人生を邪魔するな。お前なんて、社会的地位を保って私の夫でいるだけでいいんだ。子どもなんて、私の時間を奪うものなど必要ない。玩具、ぬいぐるみ、ベビーベッド。この部屋は無駄なものだらけだ。どうして効率よく仕事をさせてくれないんだ。

「死ねっ、死ねっ……」

自分の動きが鈍くなってきたのがわかった。傷のせいだけではなさそうだ。なんだか、眠いのだ。

「『アサチホーム』の技術って本当にすごいね」

オレンジ色のドアの向こうで、愁平は落ち着き払っている。

「天井のスプリングラーの横に、小さな穴があるだろ？ 今、そこから鎮静作用のあるナノ粒子が部屋を満たしているんだ。これを嗅いだら、どんなに夜泣きのひどい赤ちゃんでもたちどころに眠ってしまうんだって」

知っている。スリーピースとかいう機能だ。香りも何種類かあったはずだが、これはラベンダーだろう。冷涼感。静寂。今の今まで脳内を支配していた怒りがどんどん鎮まってく。

悔っていた……。子ども向けの機能だから関係ないと思っていた……。

尚子はいっしょか、床にあおむけになっていた。星や月や飛行機やペロペロキヤンディーが、ぐるぐると回っている。音楽はいっしょか

『シューベルトの子守歌』に変わっていた。

視界の隅で、オレンジ色のドアが開いた。

「かわいいね、尚子」

そちらに視線を動かす前に、まぶたが重くなった。

「そのまま、眠っていていいから」

すっ、と近づいてくる夫の気配。

ラベンダーの静謐さの中に、腐った柿のような香りが混じりはじめた――。

〈了〉